

近代の福祉に生きた女性パイオニア(その5)

— フローレンス・ナイチンゲールとジェーン・アダムス —

鈴木 真理子

Women Pioneers Who Lived for Modern Social Work (5)

Chapter 4 The lesson and support encountered at the work

— Florence Nightingale and Jane Adams —

Muthu RAJENDRAN and Hisashi TANAKA

第4章 仕事で遭遇する多くの試練と支援

It seems to be a contradiction that the damage from the wars lead the advance of medicine and the movement for peace. Also the aggravation of poverty during the wars fulfilled the contents of social security and this is an ironical aspect of history but a great hope for the people like the only light in the darkness. For example, Nightingale devoted herself to the nursing in the hospital field during the War of Crimea¹⁾ and H.J.Dunant²⁾ organized The International Red Cross to save innumerable deaths and injured soldiers from the War at Solferino between France and Austria. Recently, League of Nations and United Nation were associated as the organizations to pursue for the peace of the world after W.W. I and W.W. II.

In slums of the East End in Great Britain there was a serious problem of poor laborers. Upper-class students stood up to enlighten and make better for the situation of those building up the Toynbee Hall. Despite of the fact that those action were really based on reality, there was a critical opinion that they were only for the self-contentment and hypocrisy of upper-class people. However it may be a destiny that Europeans have the habit of valuing their culture and Christianity most like in the past they forced their way of life and the spirit of Christianity in their colonies.

As Jewish, Christianity and Islam have the only male god, their activities are positive and active but they are always under the protection and control of Paternalism³⁾. In that aspect Adams and Nightingale, as they are female, they consider first the perspectives of the weak who are taken care of. This is one of the characteristics of female that they have the ability to understand and feel sympathy for those people in trouble as Adams had for poor immigrants and Nightingale had for patients. To describe this concept there are words like philanthropism, humanitarianism and sympathy or mercy as said in religious way and Nightingale and Adams exactly stand for those concepts.

1 貧しい民衆の中へ、悲惨な兵士の待つ戦場へ —セツルメントのコンセプト『民衆へ帰れ』—

ロンドン、トインビーホール設立のコンセプト、教育目標は特に文化と芸術の振興におかれていた。アダムスが見学した頃も集会所、勉強会、クラブ室でサークル活動、読書会などが開催されていた。それらの活動で参考にしたものに、ラスキン⁴⁾の道路建設、デニソン⁵⁾の労働学校がある。「アメリカ西部の開拓農村に生まれ、社会的階層間のぎくしゃく、市民革命など経験のない生粋のアメリカ人、アダムスには、イギリスの社会運動史はあまりに長い紆余曲折を感じた。」⁶⁾そこは新大陸という歴史の早い時計で成長したアダムスと、イギリス本土の社会変化が緩慢な時計で動く世界の相違である。歴史の古い国では時間はゆっくりと流れ、人の変化も急激にはいかない。自分の資産の範囲で貧困者のためのトインビーホールのような施設を造ろうと決意したアダムスは1889年、シカゴに戻ると、行政関係、ジャーナリスト、上流階級の社会慈善家など様々な人に会いその活動への賛同と助言を求める一方、適当な家を探す具体的準備も開始した。

「一軒の愛と寛容に満ちた家がシカゴ市民に提供される」というシンプルなコンセプトが、ハルハウスへの多くの理解者を得ることにつながった。イギリスのセツルメントの理論と多少異なり、階級とは相互依存적であり、ギブアンドテイクの関係であるがままの世界に触れることであり、とにかく社会関係とは相互的という証明がハルハウスでのセツルメント活動の基礎理論であった。このコンセプトはやはりアメリカという階級にあまりこだわらない国で出身が上流階級でもない女性のアダムスならではの理念であろう。しかし彼女でさえ「社会の経済的な一体性を成長させることにより、社会を少しでも民主的にする」⁷⁾という遠大な構想の成功には全く自信がなかった。

そのころのシカゴは西部の牧場から運ばれる牛の畜産市場の中心として、西部と東部の鉄道の要所として巨大な都市に成長していた。過去10年間で人口は2倍に膨れ上がり、イギリス、アイルランドだけでなく、イタリア、ギリシャ、東欧からの移民でごったがえし、アメリカ第二の都市になっていた。驚くべきことにその人口の4分の3は外国移民であり、シカゴは「成功への門」と呼ばれ、移民たちはそこから新天地への希望を託して、多くは西、北、南に散って行くのであっ

た。しかしシカゴに住み着くものは、同じ国や故郷の親戚を頼って同じ町に住居をさがし、ホールステッド街近くには、一万人のナポリ、シシリー、カリブ出身のイタリア人が、裏町にはロシアユダヤ人、ポーランド人などが住み分け、世界的ボヘミアン地区と呼ばれた。それまでアイルランド、ドイツ系移民のやっていた肉体労働、低賃金の内職の縫製作業は、新しい移民層であるユダヤ人やイタリア人に引き継がれていた。

アダムスは自分の事業の拠点である家選びには、小鳥が巣を選ぶ時の本能のごとく執着した。町中の無数の建物を見ても、どうしてもかつて偶然みて引き付けられたコリント風の立派な構えの古い家が忘れられず、諦め切れずに3週間探し回った。そのため、偶然町の社会運動家が案内する途中、その前を通り、幸運にも借りられることになった時の喜びは一塩であった。それは1871年のシカゴの大火を逃れた数すくない建物のひとつ、昔の上流階級の栄華を留めた華麗な邸宅であった。玄関の左右に住居の部分と大きなサロンが位置し、2階には数家族の借家人が住んでいた。かつては工場や倉庫、養老院などに使用されていたこともあった建物で、シカゴ開拓の成功者の一人、チャールズ・ハル氏によって1856年シカゴ郊外に建てられた。その後町の急激な拡大に飲み込まれて、ついにスラムの満中に位置するようになってしまい、初代持主の名にちなんでハルハウスと呼ばれていた。

「私達はこの家をシカゴの他の家のように、写真やヨーロッパで集めた土産もの、マホガニーの家具で飾り付けた。特にこの立派なつくり合うものを選んだ。おそらく若い女主人が自分の家を飾り付ける時に、私達がハルハウスにおいて経験したほどの喜びをもった者はないであろう。」⁸⁾ また当時の持主であるミス・ヘレン・カルバーは最初の年は建物の一部を月30ドルで、後に家賃なしで全家屋だけでなく、続々と13棟も建設される建物の土地まで提供してくれた。「この遺産を残してくれたチャールズ・ハルはシカゴの発展とともに、土地や家屋の巧みな売買で富を築きました。労働者のための住宅不足を補うため、大量に建てて分割で売ってやる事業も成功させました。その本人も亡くなり、その儲けた財産をシカゴのために還元する頃かもしれません」⁹⁾

そして1889年ハルハウスの開館のセレモニーには、父親の知り合いの有名人が、古い友人の娘に一目会おうと大勢つめかけた。中でもリンカーンの「奴隷解放

の宣言」を発表の日までしっかり保管していたという人物が、リンカーンの偉大さを称え、「リンカーンはそのらにいる英雄ではなかった。民衆は彼の偉大さを理解せねばならない。ちょうど彼が苦しみながら民衆の偉大さを理解したように」とスピーチした。まさにアダムスがスラムの貧困者に抱いている思い入れをリンカーンになぞらえて称賛、激励したものだった。

その時アダムスは父親の生前の行動規範から、民衆こそ国を動かすという信念をそのまま自分のものとして受け継いだ契機として、15歳の頃の父との思い出を記している。それはイリノイ州のある地域を発展させるための、ノースウェスタン鉄道株に、農民からも投資してほしいと賢明に父が説得した集会であった。一人の老婆がそれに触発されて立ち上がり、「わたしは貧しくともパン代の一部まで地方の発展のために投資する意志がある」と賛同表明して、満場の拍手を得た時の感銘であった。¹⁰⁾

— 福祉も看護も人次第 —

ハルハウスでの活動の中心は文化活動であったが、イギリスのセツルメントの限界を見極め、その物まねにならぬよう、雑多な民族の混在する社会で成功するよう、より普遍的道德、行為規範に従った。慣れない土地で、しかも長屋やひとつの建物へ何世帯も雑居するように暮らす劣悪な環境でホームシックになりやすい移民達に、アダムスは古代キリスト教とリンカーンの思想に共通に流れている理念を適用してみることにした。教養のない移民たちの偉大さに信頼を置いたのである。「世俗的なかれらの中にある種の宗教的なもの、人道的なものを見いだした。たとえば母を失った子どもたちが、慣れない役割をはたし互いに慰め合うように、お互いの信頼感、それは砂漠における旅人同士の信頼感である」¹¹⁾

そしてアダムス自身の心の奥底に渦巻いていた倫理的教訓と宗教的信条とのギャップと矛盾への疑問は、リンカーンとオックスフォード学派の人類平等の実現のためという動機と、道德的基盤の共通点を見いだしたことで解決されていく。そして移住や病気や不幸によってこの貧民街に没落せざる得なかった者の中にも、なおかつ知的な教養の余韻を残し、隣人達から賢人と呼ばれる者もいて、彼らがハルハウスの古典読書会の中心的メンバーになった。最初からの協力者ミス・スターのジョージ・エリオット（3章注掲載）のサーク

ルなど、芸術サークルが無数に生まれ、継続されていった。

ついでハルハウス内の広間で幼稚園を開いてくれたシカゴ名門家庭の娘ジェニー・ドウもいた。屈託のない天性の明るさをもった彼女は、5年間毎日自宅からハウハウスに通って、幼稚園と働く母親のための保育園活動のために尽力した。小さな子羊たちの牧者として、また母親たちの教育係りとしてユーモアと活気にあふれ適任であった。貧民街の幼い子供達の間でさえ存在する差別感の根をたちきり、民主主義の芽を植え付けるのに幼稚園は最適な場所であった。青少年クラブは学校と違って、10数名の小グループで、豊かな想像力と自主性、社会関係を身につけることを目的とした。裁縫教室のイタリアの娘たちは細部の仕上げがおろそかになるほど、製作中の衣服のできあがりにわくわくする姿はほほえましかった。学校の勉強にはうんざりだが何か技術を身につけたいという青少年には、ハルハウスでの大工教室があった。スポーツクラブは、若者の持て余すエネルギーを有効に利用させ、路地の暗がりにならぬように良からぬ気晴らしに身を持ち崩さないよう、良き友と自由な居場所を提供したのだった。

「シカゴ少年裁判所につれて来られる不良少年の多くは、多子の貧困家庭出身の長男である。記録によると最終学年まで終了する子供は少なく、また技術的訓練、何か役に立ちそうな技を持っている者は少ない」¹²⁾ このような見識が職業的な機会を提供する背景にあった。そして子供会を成功させた一人の少女が、そのタレントにより子供達をいかに引き付け、心に深い感受性の芽を養ったかを物語るエピソードがある。「彼女は昔話しの騎士物語や冒険物語をいきいきと情感溢れて語るので、その日は子供達はいつも他の遊びをほったらかしてハスハウスに集まってくるのだった。ある日、そのクラブから一人の少年が怒りの涙を抑えて飛びだしてくるのに出会った。『もうここにやってもしょうがないや。ローランド王子は死んでしまったんだもの。』」¹³⁾ このように子供を引き付ける指導者がいかに貴重であり、また得難いかをそれからの20年の経験から嘆いている。「五階建てのビルを持ち、立派な作業室、レクリエーション施設を持つ現在でさえ、いつも付きまとっている困難は指導者確保であり、グループの成功は豊かな才能をもち、献身的なリーダーの奉仕があるかないかに係っている」¹⁴⁾ 「福祉は人なり」の言葉を、アダムスはハルハウスの活動を通じて

実感していたが、ロンドンのナイチンゲールも「看護は人なり」と、その養成の必要性和自分のライフワークを重ね併せつつあった。

— 今、主が私と呼ばれた —

1854年10月9日のタイムズ紙はクリミア戦争の悲惨な戦況に関する記事を載せ、イギリス国民をショックに陥れた。トルコの領土を侵そうと進出してくるロシアに対してイギリスはインドへのシルクロードを断たれるのを防ぐため、フランスとトルコとともに1884年3月に宣戦布告をしていた。戦場はロシアとトルコの間に位置する黒海に突き出たクリミア半島で、激しい戦闘が繰り広げられ、双方多数の負傷者が出ていた。トルコ側のスクタリのイギリス陣地では2,000人もの重病人や傷兵が治療も受けられず、床に放置され死ぬがままというセンセーショナルな記事内容もあった。最初は信じなかったイギリス国民も10、11、12日と続く特派員の生々しい速報に、事態の深刻さを思い知った。「どんな慈善病院にもある医療物資、食糧も人手も戦場では不足し、傷の軽い兵隊が互いに世話をしている。ところがフランス軍陣地には物資も十分に慈善修道会のシスターが整然と看護している」と記事は報じた。実際イギリス陸軍病院には看護婦が一人も随行していなかったが、この報道に接したナイチンゲールは体中に電撃が走ったように感じた。これこそ自分に神から与えられた重大な使命と、即座に看護婦としてクリミア行きを決意をした。

ちょうど、ローマでの知遇以来ナイチンゲールと親交の深いシドニー・ハーバード卿が戦時大臣となっていた。「数人の看護婦を連れてスクタリにいく用意があります。食事と宿泊も私費でまかない、ご迷惑はかけません。タイムズ紙の内容をそのまま信じるわけはありませんが、お役に立てると思います。私はレディではなく、本物の病院看護婦です。」とハーバード夫人宛に志願の書面を14日に発送した。すぐ入れ違いハーバード卿から15日付けで、イギリス陸軍の負担において看護婦団を送る計画とその結成と団長をナイチンゲールに依頼する手紙が届いた。この一連の偶然は、ユング¹⁵⁾の言う共時性 (coincidence) で、単なる偶然性でない必然性を帯びた一致ともいえる事象である。偉大な人物同志の精神交流には、このような奇跡的事象が起こり得る。

その申し出を受けたナイチンゲールは即「淑女病院」

に辞表を出し、事態の緊急さを考え早速看護婦の選定にかかった。あらゆるつてを頼ってシスターの看護婦24名、方々の病院からの職業看護婦14名による、合計38名の看護団が創立された。10月21、タイムズの記事を見てから10日足らずの迅速な旅の準備の後、にわか仕立ての不細工な制服に身を固めた一行は一刻も早く傷病兵を手当するため、盛大な見送りを受けて出発した。34歳にして神の召命の責務を果たすべく、慣れない船旅や鉄道、陸路をたどって一行はマルセイユ経由で地中海に船出した。船酔いに苦しみやつの思いでボスボラス海峡を抜け、コンスタンチノーブルに到着したのは11月3日であった。

ナイチンゲールに任される予定のスクタリ病院の兵舎は4つ、トルコ軍からイギリス軍が病院用に借り受けたものだった。中の一番大きな建物が看護婦棟として起居に当てられたが、家具もなく不潔で粗末なことに一同驚いた。しかし、これは序の口、次の日病院の有様を見ての驚きには比べものにならなかった。タイムズ紙の記事以上の現実の惨たらしさ、傷口からうじがわき呻き声さえあげられない血まみれの数百の兵士が、汚物にまみれて床に転がされていた。その光景は病院というよりもまさに地獄であった。

2 一 病氣と悪意、偏見と闘う 一

一 クリミアでのイギリス軍の惨状 一

「クリミア戦争でのナイチンゲールの功績は、傷病兵の死亡率43%を2%に減少させたことである」と看護の奇跡のごとく功績を称えられている。数字は伝記により22%と5%と様々で、その時代のデーターなので精度は疑問である。多少の数字の誇張はあれ、ナイチンゲールの病院改革によって、コレラ、栄養失調、その他の伝染病併発で死に至った多くの傷病兵を救ったことは紛れもない事実である。しかし、それは魔法でも奇跡でもなく、そのころの戦場での各国軍の衛生・医療体制の発達段階を知っておくと理解されるだろう。

19世紀、欧州が戦いに明け暮れた歴史は、近代戦争の発達とともに軍医学の発達をも促した。そのころ医学や衛生学の一番発達した国は、プロシア（ドイツ）とオランダであった。ワテルローの戦争ではナポレオン軍と対仏同盟軍が、1815年ブリュッセル郊外で熾烈な戦いを繰り広げた。当時ブリュッセルはオランダに属しており、オランダ軍の医団が傷病兵の治療にあたった。オランダ医軍の野戦病院のシステムは、それまで

の戦いと比較して格段に近代化されており、前線の傷病兵は野戦病院から後陣の病院に送られ、重傷者から基幹病院に収容された。しかしそれは数千単位の戦闘の負傷者への対応であって、30万近い兵隊のそれも銃や大砲など近代兵器による傷害に対応できるものではなかった。4日間で2万7千ものけが人が出て、ブリュセルに寄せ集められることになった。町中の慈善病院、教会から公共の施設まで、広い場所のあるあらゆる建築物や民家には夥しい傷病兵が収容された。

そこで活躍したのが、オランダ国王直々に指揮を命じられたブルーマンスという軍医総監であった。かれは民間の医師に非常召集令で町に集合させ、臨時軍医として徴用し、医療団を組織し、過密を解消するため、軽い傷病兵を近隣に移送し、死体は腐敗と伝染病予防のため早急に埋葬し、重病者のためのテント、バラックをすみやかに建造した。この合理的な選別対応と機敏な行動、公衆衛生の処置が、伝染病の予防を成功させ、多くの町の市民と傷病兵を救った。このブルーマンスがオランダに陸軍医学校を創設し、大学より実践的に進んだ医学教育を広めたと言っても過言ではない。およそ40年後、この教訓に学んだフランス軍がクリミアに送った軍隊医師団は、イギリスより遥かにましな野戦病院体制をもっていた。しかしながら、19世紀後半の近代武器の破壊力の進歩の方はもっと急速で、また不慣れな土地と風土のため、フランス軍も苦戦を強いられていた。しかし医療体制の劣るイギリス軍の悲惨さは今さら言うに及ばない。

重傷を受けた大勢の兵士は、「奴隷船」と呼ばれた輸送船で荒れる黒海をぞくぞくとスクタリに運ばれた。甲板の寒風に吹きさらして横たえられ、飲まず食わずで10日間揺られて野戦病院にたどりついても多くは兵士は息が絶えるか、症状が悪化していた。輸送船の地獄の船旅から兵士を待っているものは、設備もない広い建物の床に寝かされた2千人の病人の列だった。船中の地獄絵がより大規模化しただけの、無秩序、混乱そのものであった。医薬品、包帯どころかベッドも満足になく、毛布、シーツ、タオル、洗面器、石鹸、食器あらゆるものが不足していた。部屋の脇の下水管には汚物がつまり、汚水が溢れ、看護婦たちが卒倒しような異臭を放っていた。これはとても病院とは呼べない、刑務所でさえまだましな不潔極まりない代物だった。栄養失調、凍傷の他、赤痢やコレラがはやり、洗浄も殺菌の設備もない病院では手術しても壊疽や、

敗血症をおこし、次々に息を引き取る兵士が絶えなかった。看護婦の中にもコレラに伝染するものもあり、ナイチンゲールの右腕であった有能なシスターも到着して翌月一人なくなっている。「私はヨーロッパの都市のいわゆるスラムという一番きたない所を何カ所も知っていますが、この野戦病院とくらべるとどこだって上等です。」ナイチンゲールはシドニー・ハーバード卿に早速書き送った。

出発に際して「現地では、物資が思うように調達できないと聞いております。何かこちらから用意していきましょうか」と申し出たナイチンゲールに、陸軍医務局上層部長官やシドニー・ハーバード卿は、「医療品、必要物資、医者、人手十分です。あなたは看護にだけ専念してください」と請け合っていた。確かに物資は届いてはいるが、貯蔵庫に山積みですぐ申請して使用できる体制になっていない。それに病人、傷の治療に必要なものは不足し、不必要な使えないものばかり倉庫に溢れていた。緊急のものを注文しても到着するのに2か月も輸送にかかる。人手は十分と言われたが、衛生兵は自分の仕事を果すどころか病人の世話など、できるだけ避ける有り様だ。調理場はあるが、数千人の食事を調理するには設備が粗末すぎたし、病状に応じた消化しやすい、栄養のある食事を提供している様子はなかった。なぜこのような無秩序と惨状が野放しにされていたのだろう。

— 惨めな傷病兵のために戦う —

その疑問への答えは、スクタリの陸軍内部の全貌をつかむにつれ分かってきた。長年の平和に安穏として、英国軍中枢部は無能さと統率力のなさを増殖していた。事なかれ主義の規則信奉者、地位とメンツに執着する指揮官、混乱に乗じて私腹を肥やす物資担当者、まさに腐敗と無秩序がはびこっていた。そしてその犠牲者はイギリス本土からはるばるやって来て、僅かな傷がもとでなくなっていく若き兵士たちであった。ナイチンゲールが自らイギリス女性の未到の東欧の戦場に飛び込んだのは、これら貧しい兵士たちが虫けらのように無残に死んでいくのを、一人の英国キリスト教徒として、また看護婦として見過ごせなかったからである。農民や下層階級の歩兵と上流階級の下士官では、当然介護の程度、救出にさえ歴然とした差別があり、死亡率も当然大きく異なった。しかしナイチンゲールは身分による区別も差別もない看護を垂範した。

このように階級差別と非人間性がはびこる英国軍隊の戦場に、「トルコにおけるイギリス陸軍看護婦監督」の肩書のもとにナイチンゲールが乗り込んできたのだから、反発を買うのはしごく当然であった。命令上歓迎するのは表向き、裏ではあらゆるいやがらせと嘲りが浴びせられた。当時クリミア半島で医療の総監督に当たっていたホール博士は、自分のやっていることにけちをつけられるという不安と反感をあからさまに表した。このような正当性のない防衛本能はいやがらせという形を取る。彼もナイチンゲール看護団に自分の縄張りを侵されないよう、部下たちに一切協力、看護の手助けを禁止するよう指示した。この人物こそ、翌年イギリス野戦病院の改善のため調査に乗り出したナイチンゲールたちをことごとく妨害する張本人でもある。ナイチンゲールにつけられたあだ名は「ザ・バード」「ミス・バード」。兵士たちは嘲笑するかのようにこう呼んで、上流階級育ちのお嬢さんに何ができるかと、悪意で傍観するのみで、協力の手を差し伸べるものは誰もいなかった。

一 内なる敵と増える支援者

ナイチンゲールの戦場での敵は、ロシア軍ではなく同胞であるイギリス軍の司令官や軍医たちであった。そして看護婦の中にも本国にナイチンゲールの誹謗を送る不心得物がいた。しかしこの程度の逆境でへこたれるナイチンゲールではなかった。看護の勉強ができるまで10年間も待った忍耐強さであるから、スクタリについて数日、シーツやシャツの繕いばかりさせられても、じっと看護婦たちに辛抱するよう説得した。そんな中でナイチンゲールを支えたのは、フローレンス家からナイチンゲールに付いてきた家政婦のクラーク夫人と淑女病院からの長年の協力者、ブレースブリッジ夫人、そして遅れて到着したブレースブリッジ氏、そして新しい支援者として何より力になったのはタイムズ紙従軍記者のマクドナルド記者と従軍牧師のシドニー・オズボーン師であった。

マクドナルド氏は本国の新聞読者から預かったタイムズ募金をもって、自分で確認できる有効な使い道を探していた。またオズボーン牧師はシドニー・ハーバードの友人であり、マクドナルドと二人で戦場の様子、スクタリ病院の真実の状況をどんどん本土に書き送った。このイギリス本国からやってきた民間人の二人は、腐敗した軍の体制を批判的に観察し、軍指導層

に組み込まれることなく、誰が一番傷付いた兵士たちのために働こうとしているか見抜いていた。オズボーン牧師はタイムズ紙にS.G.Oのイニシャルで多くの戦場報告記事を書いたが、中にナイチンゲールの人となりをよく言い表した箇所がある。

「フローレンス・ナイチンゲールは、外見からは30過ぎの品のよい婦人といったところだ。その姿、顔つきは、とりたてて美しいというのではない。がなんとも言えない魅力のある人である。一度あったらなかなか忘れられない人である。ほほ笑むと愛嬌のこぼれる顔、しかもその目には沈着さがあふれている。そして必要な時には、冷静な確固たる決断の色をみなぎらせることができる目である。彼女の態度は全体からいうと、静かで控え目である。しかも彼女はけっこうだけたところもあり、ユーモアもわかる。フローレンス・ナイチンゲールは人の上にたつように自らを鍛えた人である。そして人との和解、自分を押えることの大切さを自ら学んだ人である。」¹⁶⁾

看護ができないなら家政婦となって食事を作ろう。これも正面突撃ではないナイチンゲールの得意な側面作戦である。ちょうど看護婦棟の部屋には専用の台所がついている。食欲がなく体力の回復が図れない重病人に、消化の良い暖かなスープや葛湯を飲ませたら、回復の助けになるという提案には医者も異論を差し挟まなかった。食事の世話は女の仕事だから、医師たちの聖域を犯すまいと判断したのだ。そのための必要な食糧を町で仕入れるには、ナイチンゲール自らもってきたお金と、マクドナルド氏の募金が当てられた。これで堅い肉ばかりで下痢ばかりしていた病人、食べられるものがなく餓死寸前だった危篤状態の病人も体力が蘇り、回復する者が出てきた。

今日のように抗生物質などの特効薬や栄養剤、高度な手術技術のない頃、患者の生死をわける鍵は患者自身の体力と生命力であった。まさに食事と環境は生死の分かれ目であった。ナイチンゲールが看護に占める食事を非常に重くみたことは、看護覚書に多くの調理に関する記述があることから伺える。「看護婦たるもの、酸っぱくなった牛乳、変質した肉、スープ、腐った卵、生煮えの野菜などを患者に出すようなことは決してあってはならない。」「お茶や飲みものを作ったり、薬剤を溶かす時は、軟水か濾過水を用いること」¹⁷⁾

ナイチンゲールはこの特別食も医者からの許可がある場合のみ調理し、食べさせる方針を守り、医者から

の信頼を得ることをこの時点では優先した。はやる心をおさえて、徒に先輩の医師、将校たちを刺激する争いを避けて、忍耐よく看護団の地位を確保するための布石を打っていた。その間にも兵士は死んでいくのであるが、後の大きな成果のために今を隠忍自重する冷静な戦略家でもあった。

この辛抱のおかげで、後々ナイチンゲールの活動をバックアップしてくれる味方はどんどん増加した。スクタリの病院改善に調査団を派遣して下水、水道など画期的な改革を支援してくれたハーバード卿の後を引き継いだパンミュア卿、この二人はナイチンゲールがロンドンにかえってから、全イギリス陸軍兵舎の建築や衛生施設改善を行うため内閣を動かす力になった。またスクタリ病院への調査団のメンバーで、後36年間ナイチンゲールに協力した公衆衛生の専門家である医師のサザランド博士、パンミュア卿の後ろ盾で4人の助手を連れてロンドンから食事改革にやってきた一流のシェフ長ソワイエ氏、彼の厨房や調理システムの改革により紅茶やビスケット、シチューなど栄養と経済性を備えた料理が、各病棟に提供されるようになった。

— 看護団の活動開始とその目覚ましい活躍 —

11月のクリミアは厳しい冬のさ中である。看護団が到着して数日後、インカーマンでの大激戦による負傷兵500人がスクタリに運ばれてきた。今度こそナイチンゲール看護団の手を借りなければ、この窮地が切り抜けられないと医師たちも判断し、ついに受け入れ準備の協力を許された。物資調達係りから大量のタワシを出してもらい病室の床を看護婦たちが2日ばかりでみがき、その上に直にわらで緊急に作ったマットレスを並べた。奴隷船がつくと患者を片っ端から服を脱がせ、体を洗って次々と流れ作業で寝かせていった。一日働きつめて、全員の処置を終え寝かせ終わってふと空を見上げると、すっかり夜の帳が落ちて月が出ていた。

「ここではベッドが4マイル（1マイル＝1.6km）も続いている。ほんの46センチの間隔をおいて。そして患者はまだまだ送られてくるだろう。」その日の日記にそう記されている。⁸⁰「ところがそれを迎え撃つ病院には、どんな貧弱な慈善病院にでもあるような設備さえない、傷の手当をする包帯さえ不足している」⁸¹ 実情だったのだ。マクドナルド氏の協力で、タオル、歯ブラシ、包帯の布など様々な生活用品を整え、ひと

心地ついた。ハーバード卿もどんどん手紙で必要な下着など物資を輸送する依頼をした。「もっかのところ病院の兵士たちは、シャツもシーツも不足しています。こちらは寒さが厳しく至急シャツだけで送られたし」。「私は兵舎の世話係、何でも屋、シャツ、靴下、ナイフにフォーク、テーブルにベンチ、タオルに石鹸、キャベツに人参、便器に手術台、なんでも取り扱います」半ば自嘲ぎみに書くこともあった。⁸²

必需品が整えられ病室らしくなり、病人がナイチンゲールを慕うようになると、衛生兵や役人たちもナイチンゲールを見直し指示に従うようになった。以前の嘲笑や興味本位は次第に評価と敬服に変わっていった。戦場での荒くれた下級兵、威張りたがる軍医たちに認められるために、ナイチンゲールは万事冷静で理論的、厳密で徹底したやり方で切り抜けた。物資の出納の管理、便所の清掃の合理的やりかた、病室の便器の洗浄、下着、シーツの洗濯用ボイラーの購入、そして新しい病棟の建設まで実現させた。12月にはまたクリミアからの傷病兵の輸送が予定され、スクタリにはもはや病人を収容する屋根のある建物は残されていなかったのだ。このころクリミア半島のセバストポールの前線に1万1千人、スクタリには1万2千人の兵士が病気で闘えずにいた。その殆どが戦争での負傷ではなく、赤痢、チフスの伝染病や野菜不足の壊血病、寒さによる凍傷が多く養生と治療が必要であった。

そこでナイチンゲールはタイムズ紙のナイチンゲール基金も利用し、トルコの大工たちをつかって病棟建築を実行した。パンミュア卿派遣の調査団との意見を一致をみて、今回は病棟ごとに看護室、便所を配置し、浅い溝を掘っただけの下水を深くし蓋をして衛生を考慮し、下水と水道を汚染予防するため配管設備を施し、ごみ処理場を建物から離れたところに指定した。これらの公衆衛生的環境改善により患者たちの伝染病の感染が予防され、死亡率が激減したのである。ベッドのそばで付き添う看護では数人の命しか救えないが、感染と併発を防ぐ病棟改革によってなら、数千規模のより多くの病人を予防できる。まさに看護を越える公衆衛生と予防医学の先駆けであった。

またナイチンゲールの看護が「看護を超える看護である」所以の証明がもうひとつある。それはソーシャルワークにあたる。問題を抱える本人、家族全体の医療、経済、住宅、心理的問題などの悪状況を総合的に解決に導く援助方法である。ナイチンゲールはまさに

クリミアの兵士たちにソーシャルワークを行った。軍曹以上の兵士が連れてきていて何もすることのない妻たちを、洗濯場で兵士の下着とシーツを洗う仕事に雇い、牧師の妻にはその作業と配置のローテーションを管理する監督者の役目をあてがった。コック長には回復した兵士の中からどんどんコックを訓練し、調理人材を養成するよう仕向けた。回復途中で自由に行動できる兵士たちの退屈を有意義に過ごさせるため、読み書きを教える教室や図書館を提供した。家族に手紙がかけられるようになると郵便局も開設させた。せっかく命を張った給料を酒や女で浪費させないため、本国へ送金できる銀行窓口を代理した。帰国した後本国でまともな仕事につけるよう、学習と貯蓄を奨励したことになる。これこそ戦場での生活指導、ソーシャルワーク、社会事業である。

このように病院にも味方が増加したが、より多くの味方は本国でナイチンゲールの記事を読み、その英雄的行為に感銘を受け、ナイチンゲール基金に寄付、兵士への義援金、支援物資を送ってくれた国民たちである。1855年ロンドンではナイチンゲールをよく知る人々が中心になり、ナイチンゲールに国家的感謝を表するため政府、軍の関係者も含んで、公開の大集会が開かれた。それは全国での地方集会にも及び、ナイチンゲール基金が創設され、当時の金額で4万4千ポンドの巨額の寄付金が集められた。この使い道はシドニー・ハーバードの意見を入れて、貴金属の記念品を送るのではなくナイチンゲールの後の活動資金として贈呈されることになった。「ミス・ナイチンゲールはすでに始めている善き仕事を発展させることを考えている。イギリスが彼女に報いるためには、その仕事を実現する手段を提供する以上に善い方法があるでしょうか。」²¹⁾ここで最も感動的なことは、基金の内9千ポンドは戦場からの帰還兵、また戦場で療養中の兵士たちが給料の一部を寄せたものと言われている。

— 困難な看護婦の統率 —

傷病兵と軍の兵隊の扱いにおいては、きちんとした仕事と態度で評価を獲得したナイチンゲールであるが、最後まで苦勞したのは、寄せ集め看護婦たちの資質向上とその統率であった。今日のセント・トマス病院²²⁾のナイチンゲール看護学校には、そのころの看護台帳が保存されている。その当時スクタリに派遣された看護婦一人一人についてのナイチンゲール自身の筆によ

る記録が残されている。「泥酔のため解雇」「全く信用できない」「不品行のため本国へ送還」などなど。ナイチンゲールが信頼を寄せたのは、病院出身看護婦ではわずか2名、他はシスターたちであった。

出発までの少ない日数で、ハーバード夫人が簡単な面接をただけの寄せ集め看護婦であるから、いくら経験ある中年の女性ばかりとは言え、それぞれの出身背景の違い同様看護においても持味特色があった。病院看護婦は教養に欠け、不作法で酒を飲んだりする者もいるが、患者の体を触っての世話になら躊躇せず、看護の仕事に献身的である。シスターたちはしとやかで柔順であるが、行動的世話より聖書の教え、患者の魂の救済に熱心な傾向があった。看護活動と布教活動を取り違え、自分の宗派に改宗を勧めるようなシスターをナイチンゲールは「手のない天使」と呼んだ。プロテスタントのシスターはカソリックの患者より、プロテスタントの患者を優先してみたり、病室の中まで宗教の派閥争いを持ち込む傾向を、自らは英国国教会の信仰厚い信者であるナイチンゲールは苦々しくみていた。ナイチンゲール自身は宗派や聖書の言葉にこだわるより、良きサマリア人²³⁾のごとく、困っている人を見たら即座に援助の手を差し延べられる心広き人間であらうとした。

ナイチンゲールはイギリスからクリミアまでの船旅から、看護婦たちの出身背景、年令、階級などで一切区別しないよう待遇には気を使った。その代わり、規則や医師の指示には同じように従うことを強制し、自分が看護婦を完全に統率下におくことが、今回の看護団を成功させる鍵だと確信していた。そのためナイチンゲールは、態度のあまりにひどい看護婦を4名、本国送還せざる得なかった。兵士と結婚する看護婦も現れ、その補充を本国から呼び寄せたり、現地で採用したりと看護婦の数も倍以上の大大所帯になっていた。またスクタリ到着の初期、必死に働き地盤を築いている頃、本国からナイチンゲールの了承も得ずに、貴族のレディをリーダーにした第二陣の看護団が派遣されてきたことがある。これにはナイチンゲールは色をなして怒り、本国のハーバード卿に怒りをぶちまけている。やっと統率がとれた看護団のチームワークが乱れること、リーダーのレディが単なる慈善慰問のつもりで専門的看護の知識もなく、病院を混乱させるだけだと断固協力を拒否した。ナイチンゲールはここぞという場面で、奥ゆかしいとは正反対の強情さと闘争心をあら

わにするところがあった。しかしこれは、単なる自分の領域を犯される嫉妬などの狭い料見というより、相手のレベルが推察できる場合、自分の仕事への自負心と病院内の統率の乱れを危惧してのことだと解釈したい。

翌年春になってクリミアの病院改革に乗り出したナイチンゲールに対して、ホール博士と以前から看護を担当していたカソリックのシスターのマザー・ブレッジマンは自分の権限を侵されると徹底的ないやがらせを繰り広げた。物資の差し止め、医師の無視、スクタリの最初と同じ腐敗と無秩序、そして誹謗と妨害。馬にまたがってのクリミアの4つの病院の視察、それまで半年の過労などがたたって、ナイチンゲールはついにクリミア熱に侵され、改革半ばして一度退かねばならなかった。重体で生死をさまよったナイチンゲールも、ブレスブリッジ夫人や優秀な看護婦ロバーツ夫人の必死の看病で切り抜け、再度クリミアの病院改革に病後の弱々しい体力を押して取り組んだ。すぐ本国にかえって養生するよう勧める周囲に、多くの傷病兵を残して帰国など考えられないとがんとして休養さえ拒否した。クリミアの病院にいる兵士にスクタリと同じ療養環境を提供することが、自分の義務と信じるナイチンゲールは最後の力を振り絞った。そのためには、マザー・ブレッジマンと和解も考えた。しかし、再度ナイチンゲールがクリミアに到着する前、マザーはナイチンゲールの指揮下に入るのを拒否して帰国してしまった。

かくも宗教的反目や個人的反目は、戦場での兵士救済という大義に捧げるべき力を、歪め拡散させてしまう本末転倒の源となる。奇しくも偉業をなし遂げたリンカーンも「人間を理性で動くと思うな、感情で動くものだ」と言っている。病後のナイチンゲールの肖像は、病気のために髪の毛を切り、もともと細い体はもっと痩せて、寝れきった様子で、これでクリミアまでまた再度乗り込んだ体力が残っていたとは、想像しがたい。まさに体力より気力で神より託された仕事を成し遂げたというべきだろう。戦場での兵士を思いやるとき、日記や手紙の中でナイチンゲールはよく「私のこどもたち」という言葉で兵士を表現している。未婚のナイチンゲールにとって、「小さきものにしてくれたことは私にしてくれたことである」と神がキリストを人間社会に託したごとく、兵士の命は自分の子供のように貴いものだったのである。

注

- 1) フランス・オーストリア戦争(1866) イタリアのサルジニアをめぐるナポレオン3世のフランスとオーストリアが長期に渡って戦った。たまたま戦場になっていたソルフェリーノを通ったアンリ・ジュナンが両軍の傷病兵のあまりの悲惨なあり様にショックを受けて、地元の住民に呼びかけて救出と看護団を組織した。ヨーロッパ大陸で近代戦争が盛んになり、兵隊の多くが怪我や病気で死んでいる現状を救う必要がたかまり、超国家的救済組織として国際赤十字を提唱した。
- 2) アンリ・ジュナン(1828-1910) 永世中立国スイスの出身であるアンリ・ジュナンは、アフリカでの農場経営を軌道に載せるため、水利権の許可陳情のため、戦場にあったナポレオン3世に会いにでかけるが、途中で戦場で無残に死んでいく多くの若い兵士を見て、見過ごせず世話をする。若い兵士の命があまりに軽んじられていることにクリスチャンとして耐えられなかったジュナンは、近隣の住民を説得して看護団を組織し、それを他の戦場にも広める使命感を自覚する。それが国際赤十字の発祥である。
- 3) パターナリズム 親が子どもを保護するために支配することから、国家が国民を保護するという理由で自由を束縛したり、強制を加えること。1950年代の英米における法の強制に対して、自由主義者は保守主義の過度のパターナリズムと批判した。医療では医師のパターナリズムが崩れて、インフォームドコンセントの重要性が認識された。
- 4) John Ruskin(1819-1900) イギリスの思想家であり批評家で1870年ごろから、オックスフォード大学で教鞭をとるかたわら、機械文明に疑問をもち自己利益でない自己犠牲の経済を説き、社会主義ユートピアを描いた。社会改革の実践活動として、労働者のための大学を創設し、学生たちを連れて道路修繕工事を行った。
- 5) エドワード・デニソン(1840-1870) ラスキンの影響で貧困問題に関心をもち、善意のみでは貧困は救えないと、教育の必要性を説き、スラムへの教養人による移住をはじめた。セツルメント活動の先駆けといわれる。
- 6) ジェーン・アダムズ著 柴田善守訳「ハルハウスの20年」岩崎学術出版
社会福祉学双書 1978年 28頁
- 7) 同 68頁
- 8) 同 70頁
- 9) Leslie A. Wheeler『Jane Addams』Chapter 6 "A Practilcal Reformer" p70
- 10) 同 26頁
- 11) 同 30頁
- 12) 6)と同じ ハルハウスの20年 78頁
- 13) 同 77頁
- 14) 同 77頁
- 15) ユング(1875-1961) スイスの改革派牧師の息子として、

- 個性の強く幼少期に長期入院していた母親の影響を強く受けて内気な少年としてそだつ。初期フロイトと共に研究を重ねるが、徐々に精神分析とは異なって人間の無意識を深層心理、東洋的、原始的イメージの中に探った。『無意識の心理学』『変容の象徴の』『心理学的類型』などの著書がある。
- 16) ぎょうせい「世界の伝記」『ナイチンゲール』 144頁
- 17) 現代社「看護覚書」ナイチンゲール著作集 第2巻 135頁
- 18) ぎょうせい「世界の伝記」『ナイチンゲール』 140頁
- 19) 同 143頁
- 20) 国土社「世界伝記文庫」小玉香津子 163頁
- 21) 同 164頁
- 22) 後にナイチンゲールが看護学校を設立するロンドンの病院。21世紀のホスピスムーブメントの祖、シスリー・ソnderクはこの病院でケースワーカーをしていて、亡命ユダヤ青年と宿命的出会いの後、医師の免許をとり遺言として託されたホスピスを開設している。
- 23) 「あなたにとっての良き隣人とは誰か」の譬えとして新約聖書に出てくる。ユダヤ人の旅人が強盗に合い、傷をおって倒れているのを、通りすがった同じユダヤ人は皆見捨てて通り過ぎるのを、日ごろユダヤ人と敵対している民族のサマリア人の商人が助け宿に運び、宿代からすべて面倒を見て親切にしてくれたという話。